ベストピア Bestopia
第455号
2025年01月号
bestopia.jp
パリ通信
第157号

物騒な４半世紀の幕開け

昨年の1月号の見出しは「悲しい夜明け・危機の中の政治」であった。

１、今年は政治も経済も物騒である。

⑴キャベツが1600円だって！

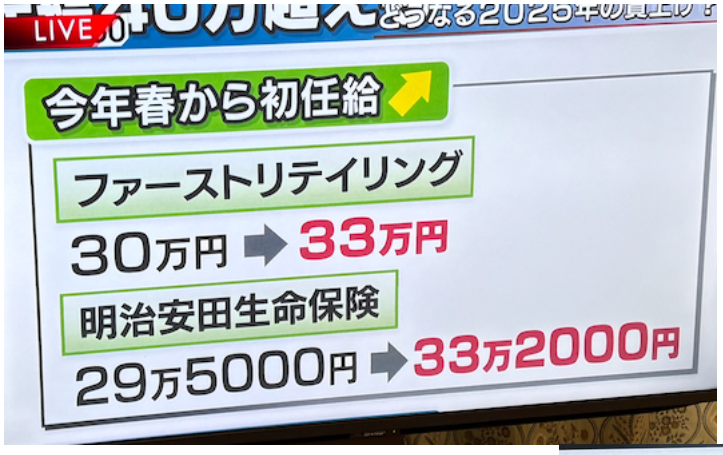
キャベツの高騰が止まらない。報道によると埼玉県のあるところでは1玉1600円という。
多くの都心でも1000円は超えている。私の好物は「お好み焼き、とんかつ」なのでキャベツは親友のような食べ物。例年200円前後で安定的に推移していたが、異常気象、物流コストの値上がり、人件費の高騰、そして致命的な自給率の低さ、政府の農業政策の失敗が一気に収斂して爆発したようである。

私自身も近くのスーパーで半玉500円を手に取ってみたがいつものような重量感はなかった。白菜も同じように高騰している。少し前まではトマトが高騰していた。そのうち落ち着くだろうと言われていたが、私の握り拳ぐらいの大きさのトマトは300円、これが落ち着いた価格のようであり、以前の価格に戻ることはない。

今年も値上げラッシュは続く。国民は値上げに慣れてしまって「怒ること」もない。
工夫して家計を管理している。素晴らしい国民性である。政治家は楽なものである。
おとなしい国民、ストをするわけでもなく、抗議することもなく、諦めて工夫を重ねて生きている。市民の苦労は政治家や経済界のトップには伝わっていない。
〈コロナ禍で行き先変わった修学旅行、次は物価で一泊減った〉高２三関真由作。（感染対策で移動距離は短縮され、物価高で３泊が２泊になった。朝日新聞川柳記事）

安い賃金で働いている人も多い、一日一食で生活している学生さんもいる。そんな人に安い食べ物を供給してくれている赤字覚悟のお店もある。政治家に町を歩いてもらいたい。多額の裏金を貰っている人に人が苦しむ裏町を歩いてもらいたい。「裏金を貰った人よ。償いをしなさい。」「国会に戻ったら良心に従って食料品の消費税をゼロにしなさい。」賃上げができない中小企業の社員さんの家計は助かるのです。

⑵初任給が35万円を超える！中小企業は大丈夫か！！



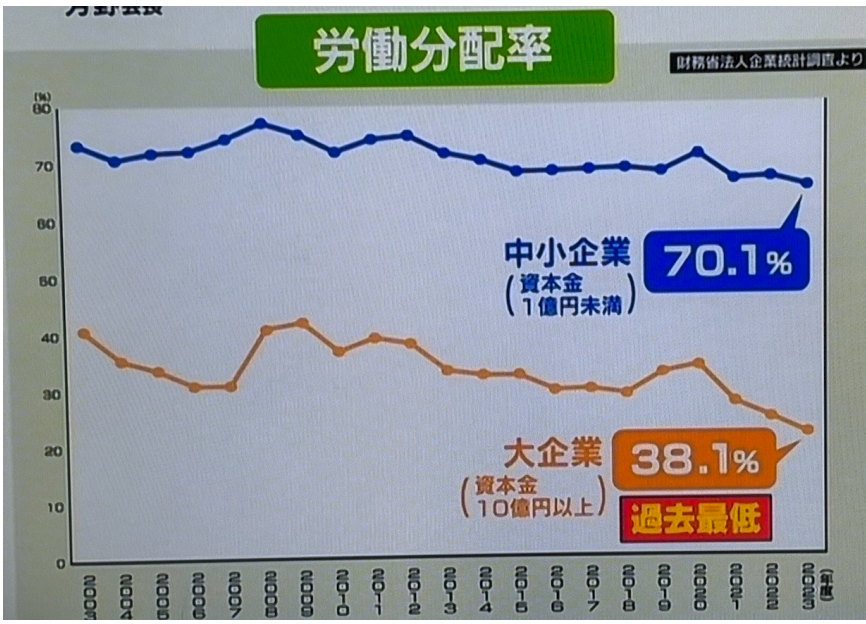
初任給が最高41万円（26年度から？）になる保険会社が現れた。ユニクロの33万円に驚いていたが、今や33万円は普通の感覚で、2025年度の初任給は35万円くらいで落ち着きそうである。一部の企業を除いてダントツの初任給は金融機関（保険会社を含む）に顕著にみられる。中小企業の初任給は20万円が相場である。特に社会福祉に働いている人はまだ18万円位である。初任給で2倍の格差がつく社会となってしまった。

総人口が減少する中、後期高齢者の人口は増えていく。80歳代の両親が病気になると看病するのは40代から50代の働き盛りの人である。両親は施設に入れなければ働けない。ところが施設では低賃金のため極度の人手不足、それでも入居者の生活は介助しなければならないから過重労働が続く。そこで何が起こるか。ましてや、社会福祉施設の理事長が高級車を乗り回していたら、そこに何が起こるか。ある割合で悲惨な事故がおこる。責められるのは薄給の職員である。悲しいことである。理事長は現場にいないから処罰は軽い。3ヶ月の減給で終わらせる。喉元過ぎれば熱さを忘れる。責任を取らないのである。

⑶労働分配率70%の意味を中小企業で働く人は知っているだろうか？

先日のテレビの報道で労働分配率が話題になった。資本金1億円以下の企業（中小企業）と10億円以上の大企業の労働分配率の推移が映し出された。（この統計には1億以上10億未満の中堅企業が省略されてはいるが、とても大事なところを浮き彫りにしている。）
労働分配率とは簡単に言えば売上額から仕入額を差し引いた総利益のこと。
労働分配率70%ということは総利益のうち70%が人件費になっていることです。

残りの30%から税金を払い、諸々の経費、例えば運送費、交通費、交際費、減価償却費など賄います。大企業は労働分配率は38%ですから、人件費に回せるお金は潤沢にあります。中小企業は人件費に回せる資金は殆どありません。初任給格差が2倍になるのはこの労働分配率の格差です。



この格差はどこからくるかが問題です。大企業は中小企業に下請けに出します。日本では５段階位の下請け構造が普通です。川下に行くほど厳しい価格で物作りをしています。中小企業の社員の給料が大企業に追いつかない原因の一つがここにあります。そればかりではありません。下請けとは大企業からの責任の押し付けが伴います。大きな事故があって大企業がどのように対処するか。第三者委員会を作るという方式です。自ら事故原因を調べる力がないのです。調べる力がある人は沢山いますがほとんどの人が「忖度という風土」に染まってます。良心が眠ってしまっているのです。人気タレントの事件や貸金庫事件を見ても明らかです。特に貸金庫は管理を下請けに外注していたという。事件が足元にあっても知らんふりが通っている。中小企業では考えられないことです。

考えてみてください。貸金庫から他人の大切な財産を何十億も掠(かす)めておいて何年も会社が察知できないような杜撰(ずさん)な組織だったら中小企業はとっくに倒産していると思いませんか。給与水準の高い大企業は、いわゆる「親方日の丸」ですから、中小企業が真剣に実行している生産性の向上につながる段取力、配慮、誠意、人の顔を見て仕事をするということがあるのでしょうか。現場にいないのです。なのになぜこんなに賃金格差がつくのでしょうか。
社会福祉に働く人の給料がなぜこんなに安いのでしょうか。社会福祉の仕事は体を張って他人の命を守っています。金融機関の人の仕事は何をしているからこんなに給与が高いのか考えると矛盾だらけです。

中小企業が生き残るには、このような下請け構造から脱する技術開発をして大企業に売り込むか、このような下請け構造に忍従して効率を上げる（一人当たりの利益を増やす）しかないのです。多くの中小企業はこの後者ですから、生き残るために創意工夫したノウハウ、涙を流した段取り、徹底した5S(整理、整頓、清掃、清潔、躾）の組み合わせです。これらの組み合わせが「カイゼン」とか「段取り8分」という言葉を国際的にしているのです。
1600円のキャベツを買える人は少数です。多くの人は値下がりを待つほかないのです。私はカット野菜で工夫して料理して貰っています。大企業並みの賃上げは毎年無理です。ここは政治の出番です。食品の消費税をゼロにする声を大きくしたいです。
財源はあります。軍事費を増大しなければ済むことです。

２、７周目の巳年の始まり

元旦午前10時私は新幹線で帰路にあった。大晦日はコバケン指揮・ベートーヴェン交響曲全曲演奏を3年ぶりに聴き歓喜に酔っていました。携帯が鳴った。こんな時間に？誰からか？彼がこんな時間に電話をしてくることはかつてなかった。いい知らせではないと判断できた。覚悟を持って電話をとりデッキに移動した。私の恩人の逝去の知らせであった。96歳、地元に愛された温厚な実力政治家で影響力の大きい方で私も随分お世話になりました。ともかく行かねばならない。3日が通夜式、4日本葬である。場所は九州新幹線筑後船小屋駅、歓喜は悲しみに変わる。万難を排して参列した。いい葬儀であった。

⑴体験が生きた賢い手段の選択

正月の移動時期であり飛行機、ホテルの手配が必要となる。このような時は体験が力を発揮する。以下の手順はビジネスマンの常識であるが高齢者には知られていないと思われますので、参考になるように詳細に記します。
①ANAの株主優待券を買う。買う場所はネットPC検索、「ノルネット」が一番簡単。
②株主優待券があると正規運賃の半額になる。今回は1枚1000円であったので往復2枚
③「ノルネット」では支払いが完了するとすぐに必要な番号をメールで教えてくれる。
④ANAのネットに入る。又は電話をする。
④ANAの画面で必要項目を入力すると座席指定までできる。
搭乗券は自分で印刷できる。電話でも同様に可能だと思います。

⑵現役並みのスケジュールをこなす。

今回は時節柄満席、2日の朝、「キャンセル待ち」で手続きに入る。ホテルは幸いにして予約ができた。ANAからの返事が気になる。
3日の早朝、福岡行き確定のメールが入る。帰りは未定のまま出発。夜には確定の知らせがあり一泊二日の福岡への旅が無事に終わった。喪主の挨拶が素晴らしくて感動した。

かくして5日の聖日礼拝は守られ、体を休めながら歯科治療は8日に終えて、10日は富山県高岡市へ二泊三日の出張に出る。大雪警報の出る中、新幹線の運行が心配であったが

これも守られて無事に帰宅したのが12日の午後。体を休めないと間もなく大きな記念の日を迎える。その後も読書会や東京での会議が待っている。体力勝負の毎日、内科、眼科脳外科診療、整形外科もこなさなくてはならない。

⑶Microsoft（ウインドーズ）がやって来る。二刀流入門

私のPC入門は65歳、機種はアップルのMacBook・Proです。
当時は銀座で初心者向けの個人レッスンがあった。熱心に通った。若い人に迷惑をいっぱい掛けた。特に重田直治君の指導のおかげで現在はアップルは使いこなしている。
アップルはビジネス界ではマイナーであるからウイルスの攻撃もない、安全性が高く高齢者の私には安心して使えるメリットがある。（最近のAIPCではシェアーは逆転している）ところが、今回アップルのバージョンアップをしたことによって私の一番大事なソフトが使えなくなってしまった。マイナーな機種にマイナーなソフトがバージョンアップはできないという。ソフトの開発者は香港の日系三世らしい。重田君が懸命に交渉してくれましたが対策はMicrosoftを補助で用いることのほかにはなかった。

13日正午、重田直治君が新品のMicrosoftを持参して来てくれました。またしてもプレゼントしてくださる。私の机の上は全て彼からのプレゼントに甘えきっています。お礼の言いようがない。恐縮と感謝が混じる喜びである。かくて、84歳にして、私はアップルとマイクロソフトの二刀流となる。。重田君にセットアップから3時間の個人レッスンをして頂き、当面の目的は達成できる見込みである。個人的には平和、平穏、感謝の毎日です。

⑷再開「炎のコバケン」へ

大晦日を振り返ってみる。13時から23時45分まで東京文化会館にいた。3年ぶりのことであるが、コバケン（小林研一郎）指揮のベートーヴェン交響曲全９曲の演奏会である。第九が始まるのは22時10分と決まっている。今回は22回目、私は今回で９度目のチャレンジ、直近の2年間は行かなかった。
3年前（2021年）の19回目はコロナ禍で合唱団は60名、小林研一郎は81歳体力に自信がないので今年が最後になると挨拶された。この年は大晦日の歓喜の第九がコバケンとのお別れでもあった。私自身も80歳を超え聴くことにも耐えらえない、終止符を打った。次の年も先行予約販売の案内は頂いていたが、「もう行かない」と決めたので感情を込めずに案内を捨てていた。ところが今年の案内を頂いて驚いたことに「炎のコバケン復活」の文字、私はなんの躊躇もなく予約をした。

何が魅力なのか。何が私を惹きつけるのか。それはコバケンさんの指揮振りです。私は自分勝手に「祈りのコバケン」と称して尊敬している。彼は指揮台で祈っている。そして楽団員個々に謙虚に敬意を表している。従って指揮者とオーケストラと合唱団が和合統一して敬虔な美を醸し出している。聴衆も巻き込まれ2500名の人々が一つになる、そんな世界が体験できる。神の国のまえどりとも言える至福感がある。第九のモチーフが、敢えて言うなれば第九の真のモチーフが実現すると私は感じている。こうして私の一年が終わり、新しい年が始まる。

ベートーヴェンの言葉の一つ「音楽は新しい創造を醸し出す葡萄酒だ。そして私は、人間のためにこの精妙な葡萄酒を搾り出し人間を精神的に酔わすバッカスだ。」

⑸心励ます三原則を語り合う

元旦の昼は妻の「お雑煮」（関西風）を食べながら前夜の話に花が咲く。葬儀参列の用意も整えながら、思い出になることの多さに驚く。

妻は昨日の朝日新聞に載っていた心に残った言葉をメモしてくれた。老年なる私にピッタリの励ましの言葉。「心励ます三原則」
『あ』の三原則　　①慌てない。②焦らない。③諦めない。
『ま』の三原則　　①迷わない。②惑わされない。③負けない。
（誰の言葉かを調べてみた。「埼玉のFMラジオ局NACK5のMUSIK BLOOPER」のDJである斉藤千夏さんと分かった。）
そこで『い』の三原則を二人で考えることにした。
①いらだたない。②言いすぎない。③いじけない。これらを合わせて
「『あいま』の三原則」として実行することにしました。

また、加藤登紀子さんの「ひらりの一言」を思い出して（12日の朝日新聞掲載）語り合いました。
「充実人生、何よりの幸せは、誰も恨まずに生きていられること。幸せとは、戦いに勝つことでも、仕事に成功することでも、お金を稼ぐことでも得られない。それは憎しみのない心です。」
17日には西洋美術館で開催中「モネ・睡蓮のとき」（晩年の作品）を鑑賞して来ました。
18日、57年前に媒酌人をしてくださった恩人の奥様を訪問して近況報告に出かけようとした時に牧師　馬場康夫先生からメールが入りました。突然の訃報です。この方は「人がどこから来て、どこに向かうか」を熟知されておられた方です。
パリ通信が到着しました。

パリ通信・第157号

ファン・エイク兄弟「神秘の羊」

1月も半ばに入りヨーロッパ全体がすっぽり寒気団に覆われパリも相当に寒い。とは言えブリュッセルに行く用事があり足を伸ばして、ゲントの聖バーフ大聖堂にあるファン・エイク兄弟の多翼祭壇画「神秘の羊」を見に行った。

パリからブリュッセルはユーロスターで1時間25分、距離にして320km。パリ・デイジョンと同じで、パリからはリヨンよりブリュッセルの方が近い。ブリュッセル・ミデイからゲントまではベルギー国鉄在来線で30分弱。
ブリューゲルの風景画のような寒々と

した家々を見ながら一日中マイナス気温のゲントに到着し、急いでトラムに乗り聖バーフ大聖堂に入った。

聖バーフ大聖堂

2012年からIRPA(Institut Royal du Patrimoine Artistique)(ベルギー王立美術遺産研究所)による修復作業が始まり6世紀に渡る汚れ、破損、欠落、加筆削除が行われ1432年当時の鮮やかな色に戻り目を見張るばかりである。
聖バーフ大聖堂はファン・エイク兄弟(兄ユベール1360/70 - 1426)(弟ヤン1385/90 - 1441)が生きた時代には洗礼者聖ヨハネを祀る教会で、聖バーフの名前に変わるのは1540年から、つまり「神秘の羊」が描かれて100年後のことである。防犯や保存の観点から現在ではガラス張りのケースを通して開いた時の図しか見れない。本来は日曜日と特別の日以外は祭壇画は閉じた形で飾られていた。

「神秘の羊」(閉じた時)

開いた時とは対照的な灰色で、最上部に預言者ザカリア、ミカヤと巫女エリュトレイア、中央のパネルに受胎告知、その下に寄進者ジュドキュス・フィエトとその妻エリザベス・ボルルートの肖像画に挟まれて「洗礼者聖ヨハネ」(仔羊を抱いた老人)と「聖ヨハネ」(マムシの杯を手にした若いヨハネ、ヨハネの黙示録を書く)が描かれていることからも祭壇画の起源が分かる。寄進者フェイトはゲントの裕福なブルジョワでゲント市の行政に長く関与し教会にも多額の寄進をした有力者である。閉じた形の祭壇画が見れないのは残念である。
15世紀初頭のゲントはブルージュ、ブリュッセルと並んで織物産業でヨーロッパ一栄え、デイジョンで生まれた第3代ブルゴーニュ候「フィリップ・ル・ボン」(善良公フィリップ3世)(1396-1467)の領地だった。1419年フランス王シャルル7世支持者に父親を暗殺されたフィリップ3 世は百年戦争中のイギリスと手を組み、シャルル7世の失脚を願うがジャヌダルクの力でシャルル7世がフランス王に即位する。1467年ブルージュで死ぬまでの47年間ブルゴーニュ公として揺るがぬ財力と権力で領地を納め、「神秘の羊」を筆頭に初期フランドル絵画の頂点を支えた人である。「神秘の羊」は1985年までフィエト礼拝堂に飾られており、「フィリップ・ル・ボン」の息子の洗礼時にはこの「神秘の羊」が開かれたのである。
全部で20のパネルから成る「神秘の羊」は画布ではなく樫の板絵だ。膠と何層にも塗った下地塗りを経て描かれ、「油彩」の技術を完成させたのがこの「神秘の羊」である。祭壇画を開いた時の美しさはこの世のものとは思えない。生きた羊の胸の傷から流れる血は

祭壇の杯に注がれる。人類の罪を贖う羊はキリストであり「聖体の秘跡(ユーカリスト)」を暗示し、手前の8角形の井戸は「生命の水」として洗礼を意味する。「神秘の羊」は12人の天使たちに囲まれ、後方の4人の手には「キリスト鞭打ちの柱」「十字架」「槍」「荊の冠」がキリストの受難を語っている。羊が置かれた野には天国のような草花が咲いている。40種類以上の草花が細部まで極めて正確に描かれている。左下の旧約聖書の人物、右手には新約聖書の使徒たち、右上には聖女たち(羊を抱いた聖女アニエス、塔を手にした聖女バルバラ、車輪の聖女カトリーヌ、花籠を持った聖女ドロテなど)人物も風景もその表現の緻密さとリアリティはファン・エイク兄弟以後の画家たち全てに影響を与えた極めて重要な作品である。16世紀の宗教戦争の破壊を免れ、ナポレオン時代にはパリに剥奪され、ゲントに帰還後もプロセイン王フリードリッヒ・ウイルヘルム3世に買い取られ、第二次世界大戦でナチスに没収されるも連合軍アメリカの手でベルギーに帰還した「神秘の羊」。裸のアダムとイヴには服が描き加えられたり、ドイツではノコギリで縁を削られたりと6世紀に及ぶ受難を乗り越えて今日修復を終えて聖バーフ大聖堂に飾られているのは奇跡としか言いようがない。

教会に入り毛糸の帽子と手袋を脱ごうとしたら係りの人が寒いから着けたまま入っていいですよと親切に声をかけて下さった。予約をして行ったが私以後には2〜3組の人しかいない。さすがにこのフランドルの寒さに観光に来る人もいないのは当然だった。

（古賀順子記）

編者から。

古賀さんの観察眼と知識には敬服します。私も偶然に「神秘の羊」が開れる時にこの地に旅をして鑑賞しましたが、こんなに細部までは私の目では見ることができませんでした。

癌を患っていた弟（召天）が私にお土産にこの「折りたたみ画」を買ってきてくれました。彼に思うところがあってのことだと考えています。（小原靖夫記）